



公益財団法人日本ユニセフ協会協定地域組織
佐賀県ユニセフ協会通信 uniwish12号 (2014年5月)

佐賀県佐賀市水ヶ江4丁目2番2号
(電話・FAX) 0952-28-2077
(業務時間) 月・火・木・金 10:00~15:00

E-mail unicef-saga@ams.odn.ne.jp
ホームページ <http://www.saga-unicef.jp/>
FBページ <http://www.facebook.com/unicef.saga>



シリア

シリア緊急募金 第110報【2014年4月30日 アンマン発】

学校や民間人への攻撃を強く非難 人が多くいる場所を狙った無差別攻撃の即停止を

ユニセフは、シリア全土で学校や民間人への残虐な無差別攻撃が続き、多くの子どもたちが死傷していることに強い憤りを表します。

4月29日(火曜日)、少なくとも無差別攻撃3件が発生しました。まず、ダマスカスのシャグルール (Al-Shaghour) でバドル・アルデディン・フセイン技術研究所 (Badr Al Din Al Hussein technical institute) に迫撃砲が撃ち込まれ、生徒が死傷しました。生徒14名が死亡し、80名以上が負傷したと報道されています。

続いて、ダマスカス郊外県のドラ (A' dra) 地区で、国内避難民が生活していたシェルターに迫撃砲が着弾し、子ども3名が死亡。さらに、ホムスの人通りが多い場所で、自動車に仕掛けられた爆弾で少なくとも100名が死亡、その多くは女性と子どもでした。また、100名以上が負傷しました。



© UNICEF/NYHQ2013-0701/GIOVANNI DIFFIDENTI
シリア難民の子ども (※本文との直接の関係はありません)

ユニセフ中東・北アフリカ地域事務所代表のマリア・カリビスは「シリア中で、人が多くいる場所を狙った無差別攻撃により、いつも通りの生活を送ることを願っているシリアの子どもたちが殺され、傷を負っています。こうした無差別攻撃は激しさを増しています。これは、常軌を逸した暴力の連鎖を断ち切り、国際法への侵害をやめるように求める我々の要請を完全に無視したものです」と述べました。

シリア内戦は4年目に突入し、国中のいたるところで、人が多くいる場所を狙って“たる爆弾”※を含む空爆や砲撃、迫撃砲、自動車爆弾による無差別攻撃が起きています。国際人道法は、このような無差別攻撃を禁じています。

ユニセフはシリア内戦に関わるすべての当事者に対し、市民へのあらゆる攻撃を直ちに停止し、国際人道法や人権法で謳われている子どもへの特別な保護を完全に順守するよう求めます。

アンソニー・レーク事務局長の声明(2012年2月23日ニューヨーク)

「シリアの人々の助けを求める切実な声や、子どもたちを苦しめているこの状況が悪化し続けている現状は、本当に耐えられないほど悲痛なものです。ユニセフは、国際社会とともに、全ての暴力の即時停止と、(全ての紛争当事者に)支援が必要な全ての人々への緊急支援活動を実施できる状況を確保することを求めます。」
「全ての紛争当事者に対し、子どもたちには、おとなが起きているこの暴力に何の責任もないことを思い出してほしいと思います。子どもたちたちは、まさに、この悲劇の犠牲者なのです。」

☆ユニセフはシリアの子どもたちの命を守るためにシリア緊急募金に取り組んでいます。

【資料提供：日本ユニセフ協会】

※たる爆弾：円筒形の容器に火薬や石油類を詰めた爆弾の通称。標的が絞りにくく広い範囲に被害を及ぼし燃焼性が高いという。そのため無差別的攻撃となり、一般住民の被害増加を引き起こしやすい。(引用：知恵蔵miniより)

子どもたちが復興計画を発表 シンポジウム『未来をつくる私がおとなに伝えたいこと』

3月27日（木）、シンポジウム「未来をつくる私がおとなに伝えたいこと～子どもと築く復興まちづくり」がユニセフハウスで開催され、被災地の学校の子どもたちが、震災の体験から自分たちが学び、地域の復興のために考えたことを発表しました。登壇した子どもたちは、宮城県仙台市と岩手県大槌町、福島県相馬市の3市の小学校の6年生。この発表に至るまで、それぞれの学校では、学年全体でいろんなアイデアを出し合い、何度も何度も練り直しました。

また、子どもたちの発表に先立って、日本ユニセフ協会「子どもにやさしい復興計画」支援アドバイザーである、竹中工務店の岡田慎氏、岡田暁子氏からの活動報告がありました。岡田氏は、「復興は、ゼロからのまちづくり。10年20年続くまちづくりです。新たなふるさとをつくり、そこで暮らしていくのは今の子どもたち。子どもたちも、復興の主演です」と力強く語られました。

個性が光ったそれぞれの発表

トップバッターで発表したのは、福島県相馬市立大野小学校のみなさん。相馬を盛り上げるためには相馬の良いところを知らなければ、と、まずはお手本として会津若松市の人たちと交流することから始め、相馬の事を考え、地域の伝統の野馬追や果物を活かしたクッキーやTシャツなどを作りました。また、今後いつ来るか分からない自然災害に備えて、遠い地域と姉妹都市になって助け合う、という提言もありました。



© 日本ユニセフ協会/2014

次に発表したのは、宮城県仙台市立七郷小学校のみなさん。復興住宅ができ、田んぼの用水路を地下に埋める計画が進むなど、大きく変わろうとしている七郷のまち。七郷小学校では、総合的な学習の時間を利用してまちの未来の姿を考え、模型を製作しました。「何を残して、何を新しくするかを決めるのが大変だった」という模型には、未来型の備蓄倉庫や太陽光発電、復興記念館など様々なアイデアが表現されていました。

最後は、岩手県大槌町立大槌小学校のみなさん。大槌小学校では未来の教室を考え、模型を作りました。4つの教室がボタン一つで回転する仕組みや、光を取り入れやすい大きな窓など、多くの工夫がなされています。子どもたちのアイデアの一部は、2016年に開校予定の新しい中高一貫校に実際に取り入れられる予定で、子どもたちは「完成を見るのがとても楽しみ」とわくわくした様子でした。

復興への道、子どもたちも一緒に

ユニセフ東アジア太平洋地域事務所で緊急支援専門官として勤務する根本巳欧さんは、講評とまとめのなかで、発表した3校の取り組みは、まさに、ユニセフが防災への取り組みのキーワードとしている「子どものための防災」、「子どもと一緒に行う防災」を体現化した実例であると語りました。そして、子どもたちから発表された大人に対するメッセージを、「子どもたちからもらった宿題」として、地域や学校をサポートしていく手段に反映したい、と話されました。

また、会場となったホールの外では、子どもたちが作ったまちの模型やTシャツなどが展示されました。参加者の方々は、シンポジウム終了後、各校の展示をじっくりとみながら、子どもたちと話したり、熱心に質問をされていました。質問されたひとつひとつに一生懸命に答え、自分たちの制作物について説明する子どもたちの表情は生き生きとし、未来を背負っていくその瞳はきらきらと輝いていました。

第3回国連防災世界会議(2015年3月)へ向けて

来年3月、宮城県仙台市で第3回国連防災世界会議が開催されます。東日本大震災被災地の復興を世界に発信し、防災に関する日本の経験と知見を国際社会と共有する機会となるこの会議に向け、ユニセフは、子どもたちが“主役”の一人として位置付けられる“子ども参画”を、日本政府はじめ関係各方面に働きかけています。子どもたちの声を聴き、子どもたちから学ぶことで、社会を自然災害に“レジリエント（迅速かつしなやかな回復力のある）”にしていけると考えています。

本シンポジウムでの子どもたちの発表は、東北の被災地のみならず、世界の復興と防災のあり方につながる大きな一歩となりました。

【資料提供：日本ユニセフ協会】



かつどうほうこく



- 2月26日（水）神崎市立神埼小学校ゆめ組（1～4年） 3月5日（水）ほし組（1～5年）
ユニセフ出前授業 神崎市放課後子ども教室ドリームパークテーマ「平和をかんがえよう」

- 3月3日（月）福岡県三潴郡大木町立木佐木小学校 募金贈呈式
○ 3月4日（火）福岡県三潴郡大木町立大溝小学校 募金贈呈式
○ 3月10日（月）福岡県大川市立道海島小学校 募金贈呈式
○ 3月11日（火）J A佐賀県女性組織協議会「愛の募金」贈呈式
佐賀県J A会館（佐賀市）

※J A佐賀県女性組織協議会（原ひろ子会長・部員約2万人）では、昭和54年の国際児童年を契機に子どもたちのための募金活動に取り組み、平成元年に「愛の募金」と名称を変え今日に至っています。活動は今年で35年目となり、毎年ユニセフや佐賀県内の児童福祉施設などに、部員の皆様の善意を届けています。



「愛の募金」贈呈式

- 3月13日（木）佐賀県三養基郡上峰町立上峰小学校 募金贈呈式
○ 3月14日（金）ユニセフ写真展（佐賀県庁県民ホール）
「3.11 東日本大震災復興支援写真展2014」



トヨタ紡績レッドトルネード募金活動

- 3月24日（月）柳川市立豊原小学校 募金贈呈式
○ 3月28日（金）佐賀市立諸富中学校 募金贈呈式
○ 4月6日（日）トヨタ紡績レッドトルネードによる募金活動
およびカードギフト頒布
（さが桜マラソン2014 佐賀県立総合体育館広場）
○ 4月11日（金）幸せの黄色いレシートキャンペーン贈呈式
およびキャンペーン参加
○ 5月3日（土）第111回有田陶器市 募金活動&カードギフト頒布



有田陶器市募金活動

賛助会員募集中！ 日本ユニセフ協会賛助会員としてご協力ください

☆公益財団法人日本ユニセフ協会の賛助会費は、ユニセフ募金や寄付金と同様、寄付金控除の対象になります

日本ユニセフ協会賛助会員とは

日本国内での募金活動、広報およびアドボカシー（政策提言）活動を担う日本ユニセフ協会を、賛助会費によって支援していただく協力方法です。賛助会員になってニュースレターや資料を入手して理解を深め、世界の子どもの状況やユニセフと日本ユニセフ協会の活動を知り、できる範囲で行動する機会にさせていただくことができます。

賛助会員の種類と期間

1. 一般賛助会員 1口 5,000円…個人の方が対象
 2. 学生賛助会員 1口 2,000円…学生の方が対象
 3. 団体賛助会員 1口100,000円…企業、団体、有志のグループなどが対象 期間は、1年ごとの更新。
- ✿ご協力いただける方は、佐賀県ユニセフ協会までご連絡ください。

ユニセフ写真展

ハッピーバースデー 3. 11 ～被災地で生まれた11人の子どもたちと家族の物語～
3月6日（木）～3月12日（水） 佐賀市立図書館2階ロビーギャラリー



2011年3月11日に生まれた子どもたちとその家族の写真とストーリーを通して、命の大切さと未来への希望を伝えると同時に、その瞳にうつるこれからの日本を、日本中のみんなが考えるきっかけをつくりたい。ハッピーバースデー 3. 11は、そんな想いから、コピーライター、カメラマン、ディレクターなどの有志スタッフにより始められました。一週間にわたり開催した本写真展には、小さい子どもを連れてご家族、学生さん、社会人の方、ご年配の方など、幅広い層の方々が足を運んでくださり、皆様それぞれの想いに馳せられていました。

【アンケートより】

○たくさんの命が失われた東日本大震災。ちょうどその日に、この世に生を受けた子どもたちがいることを知ると絶望にも似たその日に希望の光が差し込むように感じました。この写真は今後ずっと残り、被災地の方に留まらず全ての人に元気と希望、頑張る意欲をもたらししてくれると思います。大変な中、行動にうつしてくださった写真家の方、赤ちゃんのご家族に心から感謝の気持ちを伝えたいです。本当にありがとうございました。被災地の復興を心から祈ります。

ユニセフ講演会

「東日本大震災から3年～今、私たちにできること～」
3月9日（日） 佐賀市立図書館2階多目的ホール

東日本大震災から3年が経つこの期に、ユニセフ講演会「東日本大震災から3年～今、私たちにできること～」を開催し、皆さんと一緒に「自分たちには何ができるか」ということを考えました。

I. 「被災地は、今」

講師：永渕史孝氏
(支援ボランティア)



一年前、佐賀と東北をつなぐ被災地応援ボランティアに参加し、一週間宮城県内で活動された永渕氏は、その一週間で聞き、体感されたことに基づきお話をしてくださいました。

流されてしまった写真・アルバムをきれいに洗浄して復活させ被災者のもとに返す「思い出サルベージ」という活動や、託老所でのボランティア活動などを通して、被災地の方々から受け取ったメッセージは「細く長い支援を」。

「伝えたいことは3つ。災害や震災を他人事として捉えない。常日頃の地域の連携を大切にする。今を大事に生きること。」といった被災地の方の声が紹介されました。

※講演後のトークタイムでは、講演についての感想や、これから自分たちにできることなど、参加者と講師の間で活発に意見交換がなされました。

II. 「遊びを通した子どもの心のケア」

講師：本田涼子氏
(日本ユニセフ協会東日本大震災緊急支援本部心理社会的ケアアドバイザー)



プレイセラピー（遊びを通した心のケア）として被災地で活動されている本田氏は、専門的な知識に基づき、遊びの治癒的効果についてお話をしてくださいました。遊びとは、子どもにとって最も自然な表現言語であり、それによって体験を整理、理解しているため、大人がうまく寄りそってあげることが大切と訴えられました。

また、災害で心に傷を負った子どもの遊びに必要なおもちゃを具体的に紹介されました。

そして、大人は、質問・教示・指示するのではなく、子どもの様子をよく見ること、あいづち、そして子どもの気持ちを言葉にしてあげingことを意識すべきと強調され、子育て経験者の参加者を中心に、驚きと新しい気づきをもたらしてくださいました。

インドの女子教育支援

佐賀県ユニセフ協会は、2014年より「**インド女子教育**」指定募金にとりくみます。

インドのアッサム州、チャッティースガル州、西ベンガル州などでは、男の子と女の子の間に教育の格差があります。また、カースト制度の名残もあり、児童労働や児童婚も問題になっています。ユニセフ（国際連合児童基金）は、すべての子どもたちの教育の権利を守るため、女の子も勉強できるように、インド政府と協力してインドの女子教育支援プロジェクトを進めています。

この事業に日本ユニセフ協会協定地域組織、茨城県・千葉県・岐阜県・佐賀県・熊本県の各ユニセフ協会が2014年から2016年まで共同で取り組みます。

なぜインドなの？

- 世界第2位の人口で、環境問題を含めさまざまな負荷が高まって改善ができていない。
- 経済発展の裏で貧困や教育格差が広がり、特に歴史的に弱い立場にある女性や指定カーストの人々には、救いの手が届かない状況にあるという公平性において大きな問題となっている。
- 総人口の68.7%が今も1日USD2.00以下（約200円）で暮らしている。
- 北部に貧困地域が集中。少数民族や指定カーストの人々が多い。
※（指定カースト：カースト制度の外側にあつて、インドのヒンドゥー教社会において最も差別されている人々。）



南アジアの中心であるインドの改善・安定が世界全体の改善に大きな影響を与えるため。

かなえたい夢がある！

インドの女の子を取り巻く状況

- ・女の子は社会的地位が低く、学校に通わせる習慣がない。
- ・女の子は家事などの手伝いをしなければならない。
- ・学校に女の子用のトイレがない。
- ・先生が女の子だけに教室の掃除をさせる。
- ・女性の先生が少ない。
- ・初等教育以上の教育を受ける女の子がすくない。

©UNICEF/NYHQ2005-2291/Tom Pietrasik

プロジェクトの目標

- 子どもにやさしい学校やシステムを整える。
- 初等教育で、女の子も男の子も同じ教育を受けるためのはっきりした目標を決める。
- 困難な状況下の子どもたちや女の子への教育支援プログラムを増やす。
- 州政府が女の子への教育のために教師支援システムを強化する。

【資料提供：日本ユニセフ協会】

※佐賀県ユニセフ協会では本プロジェクトのため、講演会・チャリティーバザーを実施します。
多くの皆様のご参加、ご協力をお願いします。（詳細は同封のチラシをごらんください。）



ユニセフって なあに？



～経口補水塩（ORS）～



＊経口補水塩

（けいこうほすいえん: Oral Rehydration Salt, ORS）は、主に下痢、嘔吐、発熱等による脱水症状の治療に用いられます。食塩とブドウ糖を混合したもので、これを水に溶かして飲むことで、体に水分が補給されます。生水にくらべ体に対して25倍の吸収力があります。ユニセフは各地でこの経口補水塩を提供しています。

1リットル用のORSは1袋約7円で調達することができます。
(2014年)



経口補水塩（ORS）を溶かした水を飲む子ども（インド）
©UNICEF/INDA2010-00209/
Graham Crouch

安全な飲み水がないこと、トイレなどの衛生施設がないこと、寄生虫の蔓延、紛争による保健施設などインフラの破壊や人の移動・・・

こうしたことすべてが下痢性の病気を引き起こす原因となり、子どもたちの命や健康を脅かしています。

ORS（経口補水塩）の誕生

ORSの誕生は、19世紀以来のコレラ研究と深い関係があります。ORSの効用が発見されるまでの歴史を振り返ってみましょう。

1832年、アイルランドの医師ラッタが瀕死のコレラ患者15人に食塩水を注射し、5人の命を救いました。しかし、医学会は数十年にもわたり疑問を持ち、この治療法は普及しませんでした。

それから約80年後、英国の病理学者ロジャースがインドのカルカッタでコレラ患者にこの療法をふたたび実施。患者の死亡率を下げることに成功しました。

1940年代末にはオックスフォード大学の研究員が、砂糖は小腸に吸収される際に、塩と水も一緒に小腸内に運んでいくことを発見しました。また、同じころアメリカのフィリップスが今日使用されているものに近い点滴溶液をつくりだしました。その後、彼は口から水分補給できるORSの開発にも目を向けましたが、塩の割合を誤って実験中に死者を出し、落胆したフィリップスはORS研究を中止してしまいました。

しかし、フィリップスは66年に東パキスタン（現バングラデシュ）のコレラ研究所所長（現在の国際下痢研究所）に就任、ORSの開発に再び精力を注ぎはじめました。そして現地のコレラ流行の際に初のORT（経口補水療法）大規模テストに成功し、中程度の脱水症状なら点滴でなくてもORTだけで症状が回復することを確かめました。

ORSがさらに大きな効果を発揮したのは1971年、東パキスタンの内戦のときでした。隣接したインドの難民キャンプで3人にひとりが死亡するほどのコレラが猛威をふるったのです。患者の5人に2人は小さな子どもでした。あまりの大流行のため、点滴液が不足し、カルカッタのジョーンズホプキンス大学研究所からORSを持った医療班が到着しました。この医療班は3700人の患者にORTを実施し、96%以上の患者の命を救うことができたのです。一方、病院に入院したコレラ患者の死亡率は25%にも上りました。ここでORSの効用は、はっきりと証明されたのです。

子どもを救いはじめたORSパワー。その後ORSは急速に広まっていきました。1980年代にユニセフは「子ども健康革命」を提唱して、その中で積極的にORTの普及に努めました。1980年代はじめにはORTの普及率はわずか1%でしたが、現在では、最貧国の子どもの脱水症状の約半数がORTによって治療されています。また、ORSパッケージを使うのみでなく、水に砂糖と塩を溶かして飲ませる方法を家庭に広めることでさらに効果を上げています。

ORSや砂糖が手に入らない地域では代わりに穀物や果物などを糖分として利用することもできます。手軽なORTをさらに普及させ、下痢による子どもの死亡を減らすことはユニセフの大きな使命のひとつなのです。

（日本ユニセフ協会「Teachers' Network 通信3」より）



ご支援 ありがとうございます

トヨタ紡織九州(株)レッドトルネード様 昭和44年有田中学校卒業生還暦同窓会様
木佐木小学校様 大溝小学校様 道海島小学校様 JA佐賀県女性組織協議会様
上峰小学校様 豊原小学校様 諸富中学校様 母子草様
損保ジャパン日本興亜キャリアビューロ佐賀事業所様

門司歯科様 佐賀リハビリテーション病院様 ミニミニー宮店様 大塚製薬(株)佐賀工場様
大塚製薬(株)佐賀工場様 諸富北小学校様 第一生命様 ヘルスランチあららぎ様
佐賀友の会様 日本興亜損害保険(株)佐賀支店中核代理店会様 市民活動プラザ様
佐賀県商工会連合会女性部連合会様 ジェコス(株)仙台様 循誘公民館様 ポリテク様
(公財)佐賀県国際交流協会様 巨勢公民館様 佐賀県地域婦人連絡協議会様 玉屋様
佐賀大学医学部管理研究棟様 副島病院様 (有)豆田商店様 うめづ歯科小児科医院様
佐賀新聞社総務局・編集局・販売局様 佐賀共栄銀行様 今右衛門様

(2014年2月21日～2014年5月3日)

☆ いろいろな形でのご支援・ご協力に心から感謝申し上げます。
個人の皆さま方からもたくさんのご支援ご協力をいただいておりますが、この欄でのご紹介は
学校・企業・団体様等のみにさせていただきます。



これからの予定 (5月5日現在)

- ☆5月18日 (日) 第20回青年の日チャリティーフェスティバル カード&ギフト頒布 (唐津市虹の松原広場)
- ☆5月24日 (土) ユニセフ学習会 「知ることからはじめよう～インドの教育・カースト・女性～」
ご参加お待ちしております。(佐賀大学本庄キャンパス経済学部3号館)
- ☆5月25日 (日) ユニセフチャリティーバザー 「インドの女子教育」支援
※バザー品のご提供、お願いします。(佐賀玉屋デパート)
- ☆5月25日 (日) 第30回鹿島ガタリンピック会場にて
ユニセフ「インド女子教育」指定募金活動&カードギフト頒布
(鹿島市七浦海浜スポーツ公園)
- ☆6月18日 (水) ユニセフ出前授業 神崎市放課後子ども教室ドリームパーク「ほし組」
(神崎市神崎小学校)
- ☆6月24日 (火) コープさが募金贈呈式 (アバンセ)
- ☆6月25日 (水) ユニセフ出前授業 神崎市放課後子ども教室ドリームパーク「ゆめ組」
(神崎市神崎小学校)

※同封のチラシを
ご覧ください。

学習講師ボランティア募集!!

佐賀県ユニセフ協会では、学習講師ボランティアを募集しています!

ユニセフを通して知る世界の子どものこと・命・環境・平和など、広い視野で世界の問題にも目を向けられる子どもたちの育成を、あなたもお手伝いして下さいますか? 先ずは事務局までご連絡を!



の 仲間たち!

佐賀大学産学・地域連携機構 副機構長

佐藤 三郎 教授



佐賀大学の産学・地域連携機構の副機構長の佐藤三郎です。

同機構は地域の知的拠点としてこの佐賀の地に教育と研究の両面から貢献することを目指しております。

そして、若い世代にボラティア精神の増進やベンチャーマインドの喚起など、社会貢献事業に積極的に関与できる環境を整えたいと2003年3月3日に学生たちが運営するNPO法人「佐賀大学スーパーネット」を設立しました。この団体は、学内外のペットボトルの回収・分別をはじめ、地域の高齢者向けに生きがいにつながる活動を支援したり、佐賀市三瀬村では学生が中心となって「三瀬ふれあい祭り」に毎年参加するなど現在も活動の幅を広げています。

正直、参加している学生たちの中には、「単位が欲しいから」「履歴書に書きたいから」というきっかけもあります。しかし、その中で組織の一員であることの責任感に気づき、ないがしろにしてはならないという意識を持ち始めた者や、活動の中で知りえたコネクションで、本当に働きたい居場所を見つけて、何度断られても熱心に足を運び、いまはそちらに就職した者もいます。彼らは確実に自主性の中で大切なものをみつけているようです。

そして、わたしたちは佐賀県ユニセフ協会と出会いました。最初に学生たちと参加させていただいたのは有田陶器市での街頭募金活動。その時連れて行った有志の学生は1人だけでした。街頭で募金をよびかけ、多くの人が行き交う中で声をあげるといのは年頃の学生たちには気恥ずかしいところもあると思います。しかしながら、自分の「意思」を声に出して伝えるという経験をしてほしいと私も思っています。いまでは徐々に人数も増え、毎年、有田陶器市の街頭募金に参加しています。

学生たちを信用してやらなければ彼らはついてはきません。しかし逆に、信用し過ぎて、負担になったりプレッシャーになることもあります。ユニセフのようなボランティア活動も同じだと思います。その中で、もっとも大切なもの。彼らにとって『あてにされる』という感覚こそ、とても大きな後押しになっているのではないのでしょうか。

リーダーという役職、頼りにしている、任せられている…。こうした地域や仲間から生まれた体験はきっと学生たちにとって自分の糧になるでしょう。



(学生たちを様々な活動に導く佐藤教授)



(2014年5月3日有田陶器市での募金活動)

〈取材：佐賀県ユニセフ協会広報・高原陽子〉